3/3 Thu.

第650回 名曲シリーズ
サントリーホール　19時開演
POPULAR SERIES No. 650 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Guest Conductor
山田和樹（首席客演指揮者）*–p.5*
KAZUKI YAMADA

チェロ
Cello
横坂 源 *–p.7*
GEN YOKOSAKA

コンサートマスター
Concertmaster
林 悠介
YUSUKE HAYASHI

コルンゴルト
KORNGOLD
シュトラウシアーナ［約6分］*–p.10*
Straussiana
I. Polka
II. Mazurka
III. Waltz

グルダ
GULDA
チェロ協奏曲［約30分］*–p.11*
Cello Concerto
I. Ouverture
II. Idylle
III. Cadenza
IV. Menuett
V. Finale alla marcia

［休憩］
[Intermission]

ドヴォルザーク
DVOŘÁK
交響曲 第9番 ホ短調 作品95
〈新世界から〉［約40分］*–p.12*
Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"
I. Adagio – Allegro molto
II. Largo
III. Molto vivace
IV. Allegro con fuoco

※当初の発表から出演者の一部が変更されました。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
※本公演では日本テレビ「読響プレミア」の収録が行われます。

3/8 Tue.

第616回 定期演奏会
サントリーホール　19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No. 616 / Suntory Hall 19:00

指揮
Principal Guest Conductor
山田和樹（首席客演指揮者）*–p.5*
KAZUKI YAMADA

ヴァイオリン
Violin
小林美樹 *–p.7*
MIKI KOBAYASHI

コンサートマスター
Concertmaster
長原幸太
KOTA NAGAHARA

ドビュッシー
DEBUSSY
牧神の午後への前奏曲［約10分］*–p.13*
Prélude à l'après-midi d'un faune

コルンゴルト
KORNGOLD
ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35［約24分］*–p.14*
Violin Concerto in D major, op 35
I. Moderato nobile
II. Romance: Andante
III. Finale: Allegro assai vivace

［休憩］
[Intermission]

諸井三郎
MOROI
交響曲 第3番［約33分］*–p.15*
Symphony No. 3
I. A Tranquil Overture: Andante molto tranquillo e grandioso
– Birth of Spirit and its Growth: Allegro vivace
II. About Humour and Wit: Allegretto scherzando
III. Aspects of Death: Adagio tranquillo

※当初の発表から出演者と曲目が一部変更されました。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
協力：アフラック生命保険株式会社

3/12 Sat.

第245回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール　14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.245 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

3/13 Sun.

第245回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール　14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.245 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮 Conductor	**マキシム・パスカル** *–p.6* MAXIME PASCAL
ヴァイオリン Violin	**前橋汀子** *–p.8* TEIKO MAEHASHI
コンサートマスター Concertmaster	小森谷巧 TAKUMI KOMORIYA
ベルリオーズ BERLIOZ	**劇的物語〈ファウストの劫罰〉から** **“妖精の踊り”“鬼火のメヌエット”** **“ハンガリー行進曲”**［約13分］*–p.17* “La damnation de Faust”, Dance of the Spirits, Minuet of the Wills-o'-the-Wisp, Hungarian March
ショーソン CHAUSSON	**詩曲** 作品25［約16分］*–p.18* Poème, op.25
ラヴェル RAVEL	**ツィガーヌ**［約10分］*–p.18* Tzigane
［休憩］ [Intermission]	
ルベル REBEL	**バレエ音楽〈四大元素〉**［約23分］*–p.19* Les Élémens 第1曲 カオス　第2曲 ルール1 地と水　第3曲 シャコンヌ 火 第4曲 さえずり 大気　第5曲 夜鳴きうぐいす　第6曲 ルール2 狩 第7曲 タンブラン1―タンブラン2　第8曲 シシリエンヌ 第9曲 ロンドー 愛の神のエール　第10曲 カプリス
ラヴェル RAVEL	**バレエ音楽〈ダフニスとクロエ〉第2組曲**［約18分］*–p.20* “Daphnis et Chloé” Suite No. 2 I. 夜明け II. パントマイム III. 全員の踊り

※当初の発表から出演者の一部が変更されました。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場

3/3 名曲
3/8 定期
Maestro

指揮
山田和樹
（首席客演指揮者）
KAZUKI YAMADA, Principal Guest Conductor

日本が誇るエース“ヤマカズ”が意欲的なプログラムを披露

© 読響

世界が認めたダイナミックな音楽性で聴衆を魅了する山田が、約1年ぶりに登場。ドヴォルザークの〈新世界〉や諸井三郎の傑作交響曲など趣向を凝らした2プログラムを振る。

東京芸術大学指揮科で松尾葉子、小林研一郎に師事。2009年ブザンソン国際指揮者コンクール優勝を機に、ヨーロッパでのキャリアをスタートさせた。これまでにベルリン放送響、サンクトペテルブルク・フィル、パリ管、フランクフルト放送響、フィルハーモニア管、ドレスデン・フィル、BBC響、チェコ・フィル、サンタチェチリア管などへ客演している。また、小澤征爾の代役として12年のサイトウ・キネン・フェスティバル松本でオネゲルの劇的オラトリオ〈火刑台上のジャンヌ・ダルク〉を振り、17年には〈魔笛〉でベルリン・コーミッシェ・オーパーにデビュー。18年にはモンテカルロ歌劇場で〈サムソンとデリラ〉を指揮するなど、オペラでも活躍。モンペリエ音楽祭、マントン音楽祭など国際的な音楽祭にも招かれている。

スイス・ロマンド管首席客演指揮者を経て、現在はモンテカルロ・フィルの芸術監督兼音楽監督、バーミンガム市響の首席客演指揮者（23年4月から首席指揮者兼アーティスティックアドバイザーに就任予定）、日本フィル正指揮者、東京混声合唱団音楽監督、横浜シンフォニエッタの音楽監督などを務めている。渡邉曉雄音楽基金音楽賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞など受賞多数。PENTATONE、EXTONなどから多数のCDをリリースしており、20年10月には読響との「マーラー：巨人」が発売された。ベルリン在住。

3/12
土曜マチネー

3/13
日曜マチネー

Maestro

指揮

マキシム・パスカル

MAXIME PASCAL, Conductor

フランスの新鋭・パスカルが選ぶ珠玉のフランス・プログラム

©Hikaru.☆

まるで踊るように指揮し、エモーショナルかつ起伏に富んだ音楽を作り出すフランスの新鋭が、得意のラヴェルやバレエ音楽などを彩り鮮やかに奏でる。

1985年生まれ。パリ国立高等音楽院でフランソワ=グザヴィエ・ロトに師事。2014年フランス人として初めてのネスレ・ザルツブルク音楽祭ヤング・コンダクターズ・アワード受賞をきっかけに、欧州で活躍。先進的な現代音楽演奏グループ「ル・バルコン」の創設者として、幅広いレパートリーで音楽と最先端の音響・照明システムを融合させた活動を展開。〈ナクソス島のアリアドネ〉や〈月に憑かれたピエロ〉で好評を博したほか、2018/19シーズンからはフィルハーモニー・ド・パリでのシュトックハウゼンのオペラ〈光〉ツィクルス（7年間）のプロジェクトをスタートさせた。ミュンヘン・フィル、デンマーク国立響、RAI国立響、レ・シエクル、トゥールーズ・キャピトル国立管、グスタフ・マーラー・ユーゲント管など主要楽団へ客演するほか、ミラノ・スカラ座やパリ・オペラ座、ベルリン国立歌劇場、BBCプロムスなどでも活躍している。21年7月には、得意とする20世紀音楽の傑作選としてフーバー、ノーノ、シェルシ作品を取り上げ、ザルツブルク音楽祭でSWR響を指揮するなど、国際的な活躍を続ける。

日本においては、東京二期会に度々登場しており、19年2月に黛敏郎の〈金閣寺〉、21年4月にサン=サーンスの〈サムソンとデリラ〉、8月にベルクの〈ルル〉を指揮し、いずれも好評を博した。読響とは2020年12月に東京芸術劇場開館30周年記念公演で初共演し、今回が2回目の共演となる。

3/3
名曲

Artist

©Takashi Okamoto

チェロ

横坂 源

GEN YOKOSAKA, Cello

現代音楽など幅広いジャンルを得意とする俊英・横坂がロック調のグルダ作品で熱いセッションを繰り広げる。桐朋学園女子高校音楽科（男女共学）、同ソリスト・ディプロマ・コースを経て、シュトゥットガルト国立音楽大学、フライブルク国立音楽大学で研鑽を積む。2002年、全日本ビバホール・チェロコンクールにて史上最年少で第1位受賞。10年にミュンヘン国際音楽コンクール第2位受賞、09年に全ドイツ学生音楽コンクール室内楽部門で第1位受賞。これまでに出光音楽賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、ホテルオークラ音楽賞を受賞。19年には、S. スヴィリドフのチェロ協奏曲〈つばき〉を、ドイツ・キュンツェルスアウにてウルト・フィルと世界初演、翌20年に東京響と日本初演し、またM. ルグランのチェロ協奏曲を日本フィルと日本初演した。読響とは12年以来の共演。

3/8
定期

Artist

2011年にヴィエニャフスキ国際コンクールにて第2位を受賞し一躍注目を集めた気鋭のヴァイオリニスト。06年にはレオポルト・モーツァルト国際コンクールにてクレーメルから審査委員特別賞を受賞。テレビ「題名のない音楽会」に出演するなど、幅広く活躍している。

これまでに、国内の主要楽団と共演するほか、ヴェンゲーロフの指揮でポーランドの主要オーケストラとも共演する。16年のトヨタ・マスター・プレイヤーズ・ウィーンではソリストに抜擢され、国内4都市でのツアーに参加し絶賛を博す。また全国各地でリサイタルを行う一方、宮崎国際音楽祭などに参加し、室内楽にも精力的な活動を展開する。14年出光音楽賞を受賞。『レコード芸術』誌の特選盤、推薦盤を含む3枚のCDをリリースし、20年10月に新譜「Anthology」をリリース。読響とは13年以来の共演。

©山吹康男

ヴァイオリン

小林美樹

MIKI KOBAYASHI, Violin

3/12
土曜マチネー

3/13
日曜マチネー

Artist

© 篠山紀信

ヴァイオリン

前橋汀子

TEIKO MAEHASHI, Violin

2022年に演奏活動60周年を迎え、その凛とした佇まいと円熟味に溢れる演奏で聴衆を魅了し続ける“ヴァイオリン界のレジェンド”。これまでにメータ、ロストロポーヴィチ、ケンペ、サヴァリッシュ、K. マズア、小澤征爾ら巨匠の指揮で、ベルリン・フィル、フランス国立管、ロイヤル・フィル、イスラエル・フィル、スイス・ロマンド管など世界の一流楽団、室内楽でもデームス、エッシェンバッハ、ウゴルスキら名手と共演。文化庁芸術作品賞を受けた「バッハ：無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ＆パルティータ全集」をはじめ、録音も多数。04年日本芸術院賞、07年第37回エクソンモービル（現・ENEOS音楽賞）音楽賞洋楽部門本賞受賞。11年春の紫綬褒章、17年春の旭日小綬章を受章。使用楽器は1736年製作のデル・ジェス・グァルネリウス。読響とは20年1月以来の共演となる。

コルンゴルト
シュトラウシアーナ

ウィーン生まれのエーリッヒ・ヴォルフガング・コルンゴルト（1897〜1957）は、早熟の天才だった。成人するまでにバレエ音楽〈雪だるま〉（11歳）、管弦楽曲〈演劇序曲〉（14歳）、〈シンフォニエッタ〉（15歳）、オペラ〈ヴィオランタ〉と〈ポリュクラテスの指輪〉（18歳）で成功を収めている。1920年、23歳の時に書いたオペラ〈死の都〉で、その名声を決定付けた。

1934年からはハリウッドに招かれ、同地とウィーンとを往復して仕事をするようにもなった。そんな輝かしい音楽家人生に38年、影が差す。この年、ナチス・ドイツのオーストリア併合に伴いアメリカに亡命。映画音楽を書いて糊口を凌いだ。

ところが、劇伴作曲家に対する偏見や、時代遅れの後期ロマン派的作風への批判に、コルンゴルトは心をすり減らすことになる。ウィーンで味わった栄光の前半生を、せめて音楽で思い返したい。作曲家がそんな気持ちになったとしても、少しも不思議ではない。

彼の最後の管弦楽曲〈シュトラウシアーナ〉は、そうした望郷の念を強く反映した作品だ。タイトルの通りコルンゴルトは、J. シュトラウス2世の曲を素材に、3部分からなるこの作品を書き上げた。

弦楽器のピッツィカートで始まる**第1部**「ポルカ」には、オペレッタ〈ニネッタ侯爵夫人〉第3幕の間奏曲（のちの〈新ピッツィカート・ポルカ〉）と、オペレッタ〈ウィーンのカリオストロ〉に登場するポルカ〈お気に召すまま〉を引用している。**第2部**「マズルカ」は、歌劇〈騎士パズマン〉第3幕のバレエ音楽を下敷きにする。**第3部**「ワルツ」に入っても〈パズマン〉の同様部分からの引用が続く。

コルンゴルトはこうした旋律を、彼一流の管弦楽法で飾り立てていく。目立つのは弦楽器のピッツィカートやハープの撥弦、ピアノの打弦による音のきらめき。作曲家はウィーンの追憶の奥に、自らの輝かしい時代を見ていたのかもしれない。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1953年／初演：1953年11月22日、カリフォルニア州イングルウッド／演奏時間：約6分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ、クラリネット2、ファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、ティンパニ、打楽器（シンバル、サスペンデッドシンバル、スネアドラム、トライアングル、グロッケンシュピール、大太鼓）、ハープ、ピアノ、弦五部

グルダ
チェロ協奏曲

〈チェロ協奏曲〉は、ピアニストで作曲家のフリードリヒ・グルダ（1930〜2000）が1980年に書いた異形の作品だ。作曲者の回想によれば、ベートーヴェン作品で自分との共演を望んでいたチェリストのハインリヒ・シフが、いわば物心両面の賄賂として協奏曲を依頼してきた、とのこと。この協奏曲には“1980年のグルダ”がまるまる盛り込まれた。その結果、おそらくシフが思っていたのとはずいぶん違う姿になったはずだ。第1にオーケストラが管楽器中心に組まれている。ドラムやギターなども編成に加わり、どこかビッグバンドの風情を漂わせる。第2に音楽語法の源泉がクラシックだけではなく、ジャズやロックンロール、民俗音楽など多岐にわたる。そのパッチワークはグルダの脳内を活写しているかのようだ。

第1楽章「序曲」　チェロが独奏で山なりの旋律を奏でたのち、バンドがその背中を追い、すぐにロック風の8ビートを刻み出す。管楽器による穏やかな部分が続くが、その旋律も山なりで、ロック部分を裏面から照射する。以後、両楽想が交互に現れる。

第2楽章「牧歌」　“厳かに”の指示通りの堂々とした管楽合奏に続いて、チェロが跳躍と順次進行を組み合わせた（楽想上も、音符の描くライン上も）山岳と渓谷を思わせる旋律を弾き始める。中間部はオーストリアの民俗音楽レントラー。

第3楽章「カデンツァ」　独奏チェロがレチタティーヴォ風の装いでベートーヴェンの〈第九〉の残り香を仄（ほの）めかす。その後、楽想は徐々に20世紀音楽へと向かっていく。その間にタンゴのリズムや学校のチャイムなどが挟み込まれる。

第4楽章「メヌエット」　18世紀の舞曲風。イベリア半島色が濃い。中間部もスペイン起源の舞曲ファンダンゴを思わせる。

第5楽章「行進曲風終曲」　ドイツ語圏のビアホールに鳴り響くような管楽合奏と、ジャズ・ロックとを接（つ）ぎ木した陽気な音楽で作品を締めくくる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1980年／初演：1981年10月9日、ウィーン／演奏時間：約30分
楽器編成／フルート（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン、チューバ、打楽器（ドラムセット、タンブリン、トライアングル）、ギター、ジャズベース、独奏チェロ

ドヴォルザーク
交響曲 第９番 ホ短調 作品95〈新世界から〉

「新世界」とはアメリカのこと。チェコの作曲家アントニン・ドヴォルザーク（1841〜1904）にとって、アメリカははるか彼方の異国である。ジェット機が飛び交う現代とは異なり、19世紀末にヨーロッパからアメリカに渡るためには船による長旅が必要だった。この曲は、はるばるたどり着いた新世界から故郷に向けた一種の音の便りとでも言えるだろう。

ドヴォルザークがアメリカに渡ったのは、ニューヨークに設立されたナショナル音楽院の院長に就任するためだった。1891年、裕福な実業家の夫を持つジャネット・サーバーは、本格的な音楽院をアメリカに設立すべく、すでに国際的な名声を築いていたドヴォルザークに院長への就任を依頼した。当初、ドヴォルザークはこのオファーを断っていたが、サーバー夫人からの粘り強い説得と桁外れの高額報酬に心を動かされ、渡米を受諾する。ドヴォルザークはアメリカの黒人霊歌や先住民の音楽から新たな刺激を受け、新世界で受けたインスピレーションと祖国への望郷の念を交響曲第９番〈新世界から〉へと結実させた。

第1楽章　アダージョ〜アレグロ・モルト　ゆったりとした序奏から、緊迫感みなぎる主部へと続く。勇ましく推進力あふれる楽想がくりひろげられる。

第2楽章　ラルゴ　イングリッシュ・ホルンによる郷愁を誘うメロディは「遠き山に日は落ちて」あるいは「家路」の題で広く親しまれている。

第3楽章　モルト・ヴィヴァーチェ　エネルギッシュな民俗舞曲風のスケルツォ。中間部はひなびた民謡風。

第4楽章　アレグロ・コン・フオーコ　あたかも機関車が徐々に速度をあげて爆走するかのような開始部は、大の鉄道ファンだった作曲者ならでは。壮大なクライマックスを築くが、消え入るような最後の一音が余韻を残す。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1893年／初演：1893年12月16日、ニューヨーク／演奏時間：約40分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、シンバル）、弦五部

ドビュッシー
牧神の午後への前奏曲

フランスの作曲家クロード・ドビュッシー（1862〜1918）が独自の音楽語法を確立し、その名前を一躍有名にしたのは、1894年に初演された〈牧神の午後への前奏曲〉だった。象徴派の詩人ステファヌ・マラルメ（1842〜98）の同名の長編詩に寄せて書かれたこの作品は、難解で官能的な詩の世界が、染み渡る音と鮮やかな色彩で描かれ、20世紀音楽の幕開けとされた。

1890年、マラルメは自作の相聞牧歌（エグログ）〈牧神の午後〉の舞台上演を計画していたところ、友人の詩人からドビュッシーの歌曲集「ボードレールの5つの詩」（1887〜89）を勧められた。その響きと濃密な表現に魅せられたマラルメは、ドビュッシーに作曲を依頼する。当時、マラルメの自宅では、毎週火曜日に名だたる詩人や作家、評論家が集う「火曜会」が開かれていて、2人はそこで引き合わされたのだ。上演は、翌年2月と告知されたが、直前になって延期され、そのまま立ち消えとなった。それでもドビュッシーは作曲を諦めることなく、94年9月に〈牧神の午後への前奏曲〉を完成させた。当初の計画では、それに間奏曲と敷衍（ふえん）曲（パラフレーズ）を続けるはずだったが、書き上げてみると、自然な息づかいと情緒の高まり、即興的な輝きで、その後の音楽が必要ないほど完璧な曲となった。初演は大成功を収め、以後ドビュッシーは、「火曜会」に参加できる唯一の音楽家となった。

マラルメの〈牧神の午後〉は、シチリアの真夏の昼下がり、半獣半人の牧神が叢（くさむら）で夢と現実の間で水の精の姿を見たように錯覚し、欲望から様々なイメージを広げていく様子が描かれる。楽曲はまず、牧神の葦笛（あしぶえ）を思わせるフルート独奏による半音階で始まる主題が静かに示される。この主題は、調性感を回避する和声が付されて反復され、響きがうつろう。官能的な表現の中間部を経て、最後は、ホルンとヴァイオリンによる牧神の主題がクロタルの清冽な響きの中へ、まるで夏の午後の日差しのもとの夢の中へと引き込まれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1891〜94年／初演：1894年12月22日、パリ／演奏時間：約10分
楽器編成／フルート3、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、打楽器（クロタル）、ハープ2、弦五部

コルンゴルト
ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35

ウィーンの作曲家エーリッヒ・ヴォルフガング・コルンゴルト（1897〜1957）は、「モーツァルト以来の天才」と言われ、少年時代から音楽に驚異的な才能を発揮した。15歳で書いた〈シンフォニエッタ〉がウィーン・フィルやベルリン・フィルで演奏されて自信を深め、念願のオペラに取り組む。3作目のオペラ〈死の都〉（1920）の大成功によって、若くしてオペラ作曲家としての名声を確立した。

ユダヤ系のコルンゴルトは、ナチスの台頭でウィーンでの活動が困難になると、1934年にアメリカに渡り、ハリウッドに活躍の場を見出す。1946年までに21本の映画音楽を手がけ、アカデミー賞作曲賞を2回受賞した。

戦争が終結すると、コルンゴルトはクラシック音楽の世界に復帰する。ヴァイオリン協奏曲は、親友のポーランド出身のヴァイオリニスト、ブロニスラフ・フーベルマンのために1945年に作曲された。自作の映画音楽の旋律を巧みに採り入れてクラシックと映画音楽の間を横断し、ハリウッド仕込みの壮大で華やかなオーケストレーションがまぶしい。初演は、フーベルマンが健康を害したため、ヤッシャ・ハイフェッツの独奏で行われ、圧倒的な成功と称賛を得た。

第1楽章　モデラート・ノビレ　独奏ヴァイオリンによる大らかな第1主題は、映画『砂漠の朝』（1936〜37）の「愛の主題」に基づき、ゆるやかで甘美な第2主題は『革命児ファレス』（1938〜39）に由来する。重音と跳躍音程が連続する力強いカデンツァも印象的である。**第2楽章**「ロマンス」アンダンテ　オーケストラの和声的な導入に続いて、『風雲児アドヴァース』（1936）による旋律が独奏ヴァイオリンで歌われる。「神秘的に」と記された中間部は、ヴァイオリンの細やかな動きが際立つ。**第3楽章**「フィナーレ」アレグロ・アッサイ・ヴィヴァーチェ　『放浪の王子』（1937）に基づく躍動的な終楽章は、独奏ヴァイオリンの超絶技巧と歌心に満ちた旋律が交替する。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1945年／初演：1947年2月15日、セントルイス／演奏時間：約24分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット2、トロンボーン、ティンパニ、打楽器（グロッケンシュピール、シロフォン、ヴィブラフォン、大太鼓、ゴング、鐘）、ハープ、チェレスタ、弦五部、独奏ヴァイオリン

諸井三郎
交響曲 第3番

諸井三郎（1903〜77）は、我が国において、論理的な構築による交響曲やソナタなどの創作を最初期に行った偉人である。番号付き5つの交響曲や7つの協奏曲、管、弦、ピアノのソナタや弦楽四重奏など、珠玉の作品を残している。しかし、作品の充実度に比して、演奏機会が乏しく、正当な評価を得られていない。

この状況を打開せんと再評価を推進するのは、本日の指揮者である山田和樹。2019年にも諸井の初期作品〈交響的断章〉の再演をスクリャービンの〈法悦の詩〉と並べた。今回はドビュッシーの〈牧神の午後への前奏曲〉と並べた。スクリャービン、ドビュッシーの同曲を、諸井が中学時代に、評論家の中島健蔵とレコードで聴いたエピソードが思い出される。なんとも粋な選曲である。

諸井が登場するまでの日本の音楽界は、山田耕筰（1886〜1965）を筆頭とする歌曲やオペラなどの作曲が中心であり、器楽といっても日本の旋律やリズムや楽器を取り入れたような作品が多かった。そこに、西洋の音楽を徹底的に研究した上で、日本人の精神的な内面からの発露による創作を純粋な器楽曲で行っていったのが、諸井であった。

その才能には、若き日から日本の音楽界全体が期待を寄せた。今東光は「日記を書くように作曲をする男が現れた」と評した（諸井三郎「スルヤの頃」（「音楽芸術」1956年8月号）より）。信時潔は「高雅なる和声と秩序ある旋律（中略）独自の境地」とパンフレットに推薦を寄せた。池内友次郎は、諸井の〈ピアノ協奏曲〉について「日本人ばなれのしている重厚さは（中略）尊敬されなければならぬ」と朝日新聞（1937年2月2日付）に批評した。世の中が諸井を押し出そうという気運があった。東京帝国大学文学部在学中から河上徹太郎、三好達治、小林秀雄、中原中也、大岡昇平や島崎藤村らと親交を持ち、文化芸術に親しんだ。その後、ベルリンで本格的に音楽を学び、教え子には、柴田南雄、入野義朗、木下忠司、團伊玖磨、矢代秋雄、渡辺宙明らがいる。教育・作曲だけでなく楽式論やベートーヴェンの諸作品についての研究書など著述も多い。

〈交響曲第3番〉は、我が国の交響曲でも屈指の作品であるのだが、悲しいほど再演が少ない。何しろ、初演の日でさえ、作曲から6年後であった。太平洋戦争の末期、敗戦に向かう自国を見据えつつ、自身をすべて投入した交響曲は1944年5月26日に

完成された。それを予期していたかのように、諸井は同年7月には召集され、終戦まで陸軍少尉としての任務に就く。世界が異常な精神状態であった44年の〈交響曲第3番〉は、初演の機会を逃したまま、戦後を迎える。戦中を知るものからは思い出したくない記憶の一部とされ、50年に、やっと初演された。しかし、戦後の空気とは齟齬が大きかった。次の再演は諸井の没後、78年の追悼演奏会まで待たねばならなかった。それらを越えた現在だからこそ、作品の本当の価値を聴くことができるかもしれない。

〈交響曲第3番〉の各楽章には作曲者によるサブタイトルが付されている。

第1楽章は、序奏**「静かなる序曲」**と主部**「精神の誕生とその発展」**からなり、3つの主題があらわれ、絵巻物の如く主題が組み合わされては流れてゆく。序奏はアンダンテ・モルト・トランクイロ・エ・グランディオーソ、2分の3拍子。波打つような弦楽に支えられ、オーボエの旋律が管弦楽の緊張と弛緩のなかで主題をあらわす。主部はアレグロ・ヴィヴァーチェとなり4分の6拍子となるが、その構成は諸井独自の形である。

第2楽章「諧謔について」は、アレグレット・スケルツァンド、8分の5拍子（4分の2＋8分の1）。日本の歩みに対する、絶望的な切迫感が伝わる楽章。日本の祭り囃子のエコーをなぞって開始され、ファナティックに鳴り響くトランペットと小太鼓を中心に執拗に反復され、燃え盛る。

第3楽章「死についての諸観念」はアダージョ・トランクイロではじまる。暗闇に差し込む一条の光の如きオルガンに、管弦楽による賛美歌的な旋律、トランペットによる荘厳なファンファーレなど、失われた生命への鎮魂だけでなく、諦念さえ漂う。アンダンテ・トランクイロの二重フガートを経て、終結部は、クラリネットと弦楽器とオルガンが際立つ、美しく清澄な旋律となる。諸井の高弟・柴田南雄は自叙伝（『わが音楽わが人生』1995年）で「もはや西洋的でも東洋的でもない、人類の祈りの歌」と評した。

〈西 耕一 音楽評論家〉

作曲：1943年4月～44年5月／初演：1950年5月26日、日比谷公会堂／演奏時間：約33分
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓）、オルガン、弦五部

ベルリオーズ
劇的物語〈ファウストの劫罰〉から
“妖精の踊り”“鬼火のメヌエット”“ハンガリー行進曲”

文学青年だったエクトル・ベルリオーズ（1803～69）にとって、シェイクスピアとゲーテは「悩みの無言の相談相手」だったという。シェイクスピアへの関心は劇的交響曲〈ロメオとジュリエット〉他を生み出し、ゲーテへの共感は劇的物語〈ファウストの劫罰〉へと結実した。

1827年、ベルリオーズはネルヴァルのフランス語訳でゲーテの〈ファウスト〉を読む。大感激したベルリオーズは〈ファウストの8つの情景〉を作曲し、熱烈な手紙を添えて楽譜をゲーテに送るが、返信は得られない。やがて作品を「雑で、うまく書けていない」と考え直し、入手可能な写しを回収して破棄してしまう。

時を経て1845年、ベルリオーズはオーストリア、ハンガリー、ボヘミアなどを巡る演奏旅行に出かけ、華々しい成功を収める。旅の間、ベルリオーズは〈ファウストの8つの情景〉を素材にして劇的物語〈ファウストの劫罰〉を書き進め、翌年パリで作品を完成させた。合唱と独奏者を必要とする全4部からなる大作だったが、初演は聴衆も少なく、失敗に終わってしまう。「生涯でこの予想外の無関心ほど私を深く傷つけたものはなかった」と後に作曲家は振り返っている。しかし、死後の再演が大成功を収めたことで作品の人気は一躍高まった。

〈妖精の踊り〉 第2部の音楽。眠りに誘われたファウストは、夢のなかで美しい少女マルグリットの姿を目にする。優美なワルツが奏でられる。

〈鬼火のメヌエット〉 第3部の音楽。魔力により青年になったファウストはマルグリットの部屋に忍び込む。メフィストフェレスは鬼火を召喚して躍らせる。

〈ハンガリー行進曲〉 第1部の音楽。作者不詳のラコッツィ行進曲にもとづく軍隊の行進。ハンガリーでこの曲が大喝采を浴びたことから、これを〈ファウストの劫罰〉に取り入れるべく、原作にないハンガリーの場面が創案された。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1846年／初演：1846年12月6日、パリ、オペラ・コミック座／演奏時間：約13分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット4、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ2、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッドシンバル、スネアドラム、トライアングル、グロッケンシュピール）、ハープ2、弦五部

ショーソン
詩曲 作品25

フランスの作曲家エルネスト・ショーソン（1855〜99）の代表作。ヴァイオリニストで作曲家の友人、ウジェーヌ・イザイのために作曲された。ツルゲーネフの短篇小説〈勝ち誇る愛の歌〉にもとづく交響詩として着想されるが、最終的に標題性を取り除いて簡潔に〈詩曲〉と題された。短篇小説の舞台は16世紀のイタリア。親友同士の音楽家と画家が同じ美女に求婚し、画家が結婚相手に選ばれる。傷心の音楽家は東方へ旅立ち、数年後に魔術を身につけて夫妻のもとに戻る。音楽家がヴァイオリンを奏でると、妖しい力により妻は音楽家に魅了される……。

曲は単一楽章からなる。予感に満ちたミステリアスな序奏の後、独奏ヴァイオリンが瞑想的な主題を奏で、幻想味豊かな楽想を繰り広げる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1896年／初演：1896年12月27日、ナンシー／演奏時間：約16分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、ハープ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ラヴェル
ツィガーヌ

〈ツィガーヌ〉とはロマ（ジプシー）のこと。モーリス・ラヴェル（1875〜1937）はハンガリーの女性ヴァイオリン奏者イェリー・ダラーニが弾くロマの音楽を聴いたことをきっかけに新作を構想した。ダラーニの卓越した技巧と情熱的な演奏を念頭に置いて、パガニーニの〈カプリース〉を凌駕（りょうが）する難曲を志して作曲された。まずピアノ伴奏版が書かれ、次いで管弦楽用に編曲された。

前半ではヴァイオリン独奏のみによる即興風の楽想が続く。ロマ風の主題が重音、ハーモニクス、ピッツィカートなどの技巧的な奏法で彩られる。やがてハープが加わって幻想的なムードを醸し出す。後半ではハンガリー舞曲風の楽想が繰り出され、次第に高潮し、熱狂的に曲を閉じる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1924年／初演：1924年4月26日、ロンドン（ピアノ伴奏版）、同年10月19日、アムステルダム（管弦楽版）／演奏時間：約10分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット、打楽器（サスペンデッドシンバル、トライアングル、グロッケンシュピール）、ハープ、チェレスタ、弦五部、独奏ヴァイオリン

ルベル
バレエ音楽〈四大元素〉

「四大元素」とはなにか。現代人ならこう考えるだろう。まずこの宇宙にもっとも多く存在する水素、これと結合して水を作り出す酸素、それから有機物を生み出す炭素、あとのひとつは……空気の最大成分である窒素とか？　だが、これは20世紀以降の発想だ。古代ギリシア以来、長くヨーロッパで考えられてきた「四大元素」とは、地、水、火、大気（風）。これら四つを自然界の根源的な要素とする考え方は、現代ではむしろファンタジー小説やロールプレイングゲームを通して親しまれているかもしれない。フランスの作曲家ジャン＝フェリ・ルベル（1666〜1747）は、この「四大元素」を音楽によって表現しようと考えた。美しい自然界の模倣から芸術を生み出すという発想は、ヴィヴァルディの協奏曲集〈四季〉とも共通する。

ルベル家は3代にわたってフランス国王に仕えた音楽家一族であり、とりわけ才能に恵まれたジャン＝フェリは、8歳にして巧みにヴァイオリンを弾いて国王とリュリを驚かせた逸話を持つ。ヴァイオリン奏者として、また宮廷作曲家として長く活躍し、その創作活動の最後に作曲されたのが〈四大元素〉である。〈四大元素〉はまずバレエとして上演され、その後、「カオス」が導入として加えられて、「新しいサンフォニー」の副題を添えて出版された。

第1曲「カオス」は四大元素がまだ自然の秩序に従う以前の混沌を示す。ハイドンの〈天地創造〉冒頭やベートーヴェンの〈第九〉第4楽章冒頭の先駆的な表現。以降、**第2曲「ルール1　地と水」**、**第3曲「シャコンヌ　火」**、**第4曲「さえずり　大気」**の四大元素が続き、描写的な**第5曲「夜鳴きうぐいす」**と**第6曲「ルール2　狩」**、さらに**第7曲「タンブラン1＆2」**、**第8曲「シシリエンヌ」**、**第9曲「ロンドー　愛の神のエール」**の舞曲を経て、壮麗な**第10曲「カプリス」**で曲を閉じる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1737年／初演：1737年9月27日、1738年3月17日（「カオス」のみ）、パリ／演奏時間：約23分
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、ファゴット4、ホルン、トランペット、通奏低音、弦五部

ラヴェル
バレエ音楽〈ダフニスとクロエ〉第２組曲

〈ダフニスとクロエ〉は少年少女のラブストーリーを描いている。原作は2〜3世紀頃に書かれたとされるロンゴスによる恋愛物語。古代ギリシャの甘酸っぱい「ボーイ・ミーツ・ガール」だ。幼なじみの山羊（やぎ）飼いの少年ダフニスと羊飼いの少女クロエが、恋敵（こいがたき）や海賊との争いに行く手を阻まれながらも、やがてめでたく結ばれる。

1909年、モーリス・ラヴェル（1875〜1937）はバレエ・リュス（ロシア・バレエ団）の辣腕（らつわん）プロデューサーであるセルゲイ・ディアギレフから、「ダフニスとクロエ」のバレエ音楽を作曲するように依頼された。台本を担ったのはバレエ・ダンサー兼振付師のミハイル・フォーキン。フォーキンとの共同作業は難航し、ディアギレフは企画全体をキャンセルしようかと悩んだほどだったが、1912年についにスコアが完成し、ニジンスキーとカルサヴィナの主演によって初演された。

ラヴェルはこのバレエから二つの組曲を作った。第２組曲はバレエの第３場の音楽の大半がそのまま使用され、“夜明け”“パントマイム”“全員の踊り”の各部分から構成される。

Ⅰ.“夜明け”　精妙なオーケストレーションにより、次第に日が昇る様子が表現される。ピッコロ、フルート、ヴァイオリンが鳥のさえずりを思わせる。ダフニスは海賊にさらわれていたクロエと再会を果たす。

Ⅱ.“パントマイム”　ダフニスとクロエがパン（牧神）とニンフに扮して無言劇を踊る。ドビュッシーの〈牧神の午後への前奏曲〉と同様に、フルートがパンの笛を想起させる。

Ⅲ.“全員の踊り”　脈打つようなリズムとともに喜びを爆発させ、壮麗なクライマックスを迎える。

〈飯尾洋一　音楽ライター〉

作曲：1909〜12年／初演：1912年6月8日、パリ、シャトレ劇場（原曲のバレエ版）／演奏時間：約18分
楽器編成／フルート２（ピッコロ持替）、ピッコロ、アルトフルート、オーボエ２、イングリッシュ・ホルン、クラリネット２、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット３、コントラファゴット、ホルン４、トランペット４、トロンボーン３、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッドシンバル、小太鼓、テナードラム、トライアングル、タンブリン、カスタネット）、ハープ２、チェレスタ、ジュ・ドゥ・タンブル、弦五部